

＜提言編＞

1. 地域の「宝」=地域づくりの「資源」

		資源
1	花	桜,カタクリ,福寿草,エゴノキ,あじさい,ひまわり,野草
2	場所	交流館,あじさい公園,羽山の各スポット,和田山,羽山神社,各集落の神社や集会所,大小川の溪流,小学校,紙漉き伝承館,ひまわり畑
3	行事・芸能	花見,山開き,あじさい祭り,ペットポタル,山車祭り,羽山太鼓,獅子舞,笠踊り,萬歳
4	食	そば,春菊餅,羽山漬,あんぼ料理,多彩な家庭料理,ジビエ料理
5	技能・技術	紙漉き,炭焼き,繭,編組,木工,あんぼ製造,山菜採り,狩猟,釣り,山林資源の利用技術
6	人・組織	地元の資源,技能,文化を担う人々,アイディアマン,自治振興会,町内会,行事グループ,リーダー
7	信仰	羽山信仰,鎮守神,産土神,氏神,講

3) 行事・イベント:「つながり」の仕掛け

・春の「羽山山開き」,夏の「あじさい祭り」と「ペットポタル」,そして秋の「山車祭り」は,人々のつながりを強化し,外から人を呼ぶための「仕掛け」の役割を果たす。

・太鼓,獅子舞,萬歳,笠踊りなどの芸能もまた,無形文化もまた,人を呼び,地域のまとまりを保持する要素となる。

★大事なことは「本物性」の維持。

・伝統的なものはその伝統性・歴史性を正しく継承。

・新しいイベントは,他所の類似イベントに対して独自の工夫を凝らすこと

★地域づくりの資源として活用するには,人の流れを他の資源とうまくリンクさせて,より持続的な「つながり」を醸成する工夫が必要。

4) 信仰文化:共同性の社会資産

・山舟生の「場所」や「行事」,そして「まとまる力」のよりどころとして,信仰文化がある。

・羽山信仰だけでなく,集落にお堂や神社があり,各家には氏神が祀られる。

・それらは,花見や祭りの年中行事や「講」を通して,人々の繋がりを保持する役割を果たしてきたという意味で,紛れもなく「地域の宝」である。

★信仰の「内面」に関する部分までは地域づくり資源とすることはできないが,とりあえず外形的な部分は,伝統的な里山の風景や文化を象徴する交流拠点としての「場所づくり」に役立てることができるのではないかと。

1) 花:里山景観のチャームスポット

・生活を豊かにする環境資源であるとともに,人を呼ぶ資源にも。

★地域づくり資源としての活用 ... 地域全体を「里山植物園」とみてる。

★花々の名称や植物学的説明とあわせて,地域の生業や生活との関係を記した看板を設置し,観察スポットを盛り込んだガイドブックや推奨コースを作る。

★小中学校の授業と連携した観察コースを作り,学習拠点を交流館,小学校,あじさい公園,羽山,和田山などに設ける。

2) 場所:「まとまり」・交流の結節点

・花は「見る」行為の対象にはなっても,休息したり交流できたりする「場所」がなければ,来訪者はただ通り過ぎてしまうだけになる。

・そうした「場所」は,来訪者をもてなすサービス機能が付帯したり,地域の歴史や人々の「想い」が詰まった地域のシンボルとなるような場所であると,魅力はより高まる。

・私たちが訪れた中では,交流館,あじさい公園,和田山,羽山の各スポット,集落の神社や集会所,大小川の溪流,小学校,紙漉き伝承館,ひまわり畑があった。

★まずどれか1か所に,休憩・サービス機能を整備して,交流・情報拠点としたい。

5) 技能・技術・無形文化

:里山利用技能の資源化

・里山の生業を支えてきた技能や技術もまた地域の重要な資源である。

・残念ながらその多くは経済的価値を失って廃れ,その技能はかつて地域を支えてきた高齢世代の方々の記憶として残っているだけ。

★幸いにも有志により復活した「紙漉き」は,往時の地域の伝統産業を継承するものとして大事にしたい。

★他にも,炭焼き,編組,木工などの山林資源の利用技術や,かつての主産業であった養蚕や繭に関連する技術について,身に覚えのある高齢世代の技能を発掘して伝える仕組みがほしい。

6) 食材・料理

:もてなしの文化と地産地消のシステム

・私たちは山舟生訪問の度に,数々の食材と手料理を賞味させていただいた。

・そば,春菊餅,漬物,多彩な郷土料理,ワイルドなほちみつ,イノシシ肉,クマ肉,伝承館で食した料理など。

・そこには単に「食べ物」というだけではない,里山農村ならではの「手づくり」の文化としての価値がある。

・それは,コンビニフードの対極にある「里山文化」であり,交流ともてなし,そして「地産地消」の地域づくりには欠かせない資源であり,地域の「宝」である。

★その提供の仕組みと,食材知識と調理技能を支えてきた女性たちのノウハウを継承する仕組みづくりが必要。

7) 人・組織: アイディアと行動を生むマンパワー

- ・これらの資源は「自然」に生まれものではない。羽山の野草も、重い礎石や材木を運び上げて登山コースを整備し、花々を解説してくれる人がいて、外来者がふれあえる「資源」となった。
- ・行事やイベントも、運営する人の「まとまる力」があって実現できる。
- ・食文化もまたその担い手となる人々の技能があってこそ受け継がれる。
- ・他地区に先駆け実現した「自治振興会」も、「むらづくり推進協議会」以来の山舟生の自治力の伝統を土台としている。
- ・その意味で、山舟生の地域資源は、山舟生の人々が日々の生活の中で育み醸成し「開発」してきたものといえる。

- ★その知識、技能、そしてアイディアや夢を、個人や仲間内の範囲にとどめず、「地域の宝」として地域づくりを生かしたい。
- ・里山に生きてきた人々は、都市では得られない知識や技能を持つ。
- ・いま担い手の多くが「高齢者」となり、伝統の生活技能やアイディアの多くは、何もしなければ消えてしまう。
- ・それは、「山舟生」の地域文化自体の消滅につながり、個性を欠いた「伊達郡の山村」、「福島圏」になってしまう。

- ・その実現は、1つの旧村地区にできそうもないにも思われる。
- ・しかし、旧村どころか、集落の集会所を体験学習の場として小学生を受け入れて、活動体験と食事を提供して、活性化している山村の例も。
⇒水俣市「村まるごと生活博物館」

- ・幸い、山舟生では、「モデル地区事業」の取り組みにより抽出された「課題」を解決・改善しようという取り組みや、各部会ごとの活動が始まっている。
... それこそは「地元学」といえる。
- ・さらに、「あじさい祭り」や「ペットボトル」を生み出したように、「むらづくり協議会」の時代からこうした「自地域学習」は盛んである。
- ・「花桃ロード」や「お手玉」を考え出すような「学習」の機運も既に満ちている。
- ★それらを記録して継承することが大事。

- ・その前提には、地元の人々の自地域の文化や資源＝「宝」について学ぶ「地元学」の取り組みがあった。

- ★「地元を学習する」という人々の姿は、既に山舟生にある。
- ・その集大成の方向性として、「里山生活文化」を体験し、伝承し、交流する拠点地区となることを目標に掲げる。
- ・「学習」が堅すぎる場合は「楽習」を用いる例も。

以上のことを、今後の地域づくりの目標として提案したい。

2. 「宝」の活用構想

「里山生活文化交流村」構想と「楽習の村」づくり

- ・このように、山舟生には、日本の里山の生活文化資源がアンセットで存在すると思われる。
- ・私たちに、地区全体が「里山生活体験ミュージアム」のように思われた。
- ・特に、9月2日の「場所めぐり」は、そのまま「里山文化体験コース」のように感じた。
- ・日本の伝統生活文化に関心を持つ外国人には、さぞかし魅力的だろうとも考えた。
- ★地区全体を体験学習の場ととられることも可能ではないか。

- ・政策的にも、1995年に欧州の「エコミュージアム」が紹介され、98年には、農水省が「田園空間博物館」事業を始めた。

- ・また山村をアート展示の場として活用したり、「ジオパーク」も各地に広がっている。

- ★山舟生を1つの里山文化の体験学習の場とみることができそうだ。



3. エゴノキと「お手玉」の可能性

- ・地域の「宝」のうちで学生たちが注目した中に、エゴノキとその実を利用した「お手玉」づくりがある。
- ・町内会ヒアリングの折、幕田忠一さんと奥様より、和田山に部落の人が手入れをしているエゴノキがあり、花がきれいで、実には毒があつて鳥があまり食べず、種には虫がつかず心地よい音がするので「お手玉」材料に最適であること、会津木綿とコラボしてお手玉づくりを始めていること、なんとか地域づくりに役立てられないかと考えていることを教えていただいた。

- ・「エゴノキ」でネット検索すると、特徴的な樹形、花、実の画像(下写真)とともに、
- ・実から石鹼液を作る方法を解説するページがいくつもあることが分かる。
- ・「エゴノキ、花見」の検索では、地域をあげて資源化・名所化しているのは、屋久島と祖父江町(木曾川下流)くらい。



エゴノキの樹木、花、実(樹木図鑑web(<http://www.geocities.jp/greensv88/jumoku-zz-egonoki.htm>))

日本経済新聞 2014. 2. 17

街かど人物館

エゴノキでお手玉

「お手玉にこれほど手間がかかるとは」。かつて地元が多かったエゴノキの実を使うお手玉を復活させた福島県伊達市の農業、暮田忠一さん(63)は笑う。

エゴノキの実のお手玉は音が心地よく、虫がつかないため愛された。幼い頃の遊び道具をつくりだして、この木種をまいたのは10年ほど前。なかなか発芽せず苦労したが18

種まきから10年 実を結ぶ

本が育ち、昨春秋、実の収穫にこぎ着けた。ピーナツより小さい実約30個を天日で干し、一つ一つ皮をむくのに2週間以上。袋も「よい音が出るよ」何十回も作り直した。妻や自治会などの仲間力も借りて約600個を作り、高齢者のサロンや小学校に寄贈して喜ばれた。お手玉の愛好家からは「エゴノキの実を分けて」という申し出も約20件寄せられた。

エゴノキはもとも、蚕糸業の衰退で桑畑が耕作放棄地になるのを防ぐために植えられた。今は「お手玉の森」として地域おこしに使えないかと思案中。「目の当たらない存在だったエゴノキからお手玉が生まれ、昔遊びの復活につながった。エゴノキも喜んでいるのだ」と感慨深かった。

★これらからわかる「お手玉」の意義は

- ・「お手玉」は日本伝統の遊び文化
- ・お手玉遊びで歌われる歌もまた文化資源
- ・幼児の運動能力向上だけでなく、高齢者の体力や注意力の維持に役立つという現代的意義もある。
- ・「日本お手玉の会」の東北最初の支部にもなり得る。
- ・お手玉の良質の材料となるエゴノキが和田山にある。
- ・エゴノキは花もきれいで、地元の里山資源。
- ・「遊び」だけでなく、「制作」も含めた「学習」の対象に。
- ・「会津木綿」という県内ブランド品との連携も行われている。
- ・和紙や繭細工との連携の可能性はないだろうか。
- ・男女・世代を限ることなく、みんながかかわれる可能性。

★お手玉とエゴノキは、羽山山車祭り、あじさい、あんぼ柿と並ぶ山舟生のシンボル資源として生かすにふさわしい可能性を持つといえるのではないか。

「お手玉」の広がり


ネット検索では

- ・「日本お手玉友の会」のページ
- ・「お手玉遊び」競技のルール
- ・全国に44の支部
- ・関東以北は7
- ・東北は0

学術論文検索(CiNii)では、

- ・42の論文タイトル
- ・民俗文化10
- ・幼児教育12
- ・リハビリ10
- ・先端技術10

... 幅広い分野にわたる。



山車祭りの出店でみかけたエゴの実、お手玉の効能、買い求めたお手玉

「東北学院 高野」で検索して最初にリストされるタイトルをクリック

<入学生・高校生の皆さんへ>

みなさんが生まれた90年代以降、地価は超円高・グローバル経済の低成長と少子高齢化という困難な状況にあえいでいます。市では、市街地空間化の進行に対して、市民の様々な取組みが行われています。町本来の住居ペースと地域情緒の無償維持としての役割を担い、人を多岐から育成するという役割が各地で行われています。農村では、農産物の価格暴落と環境安全意識の高まりの中で、新たな畜養への挑戦が繰り返されています。地域固有の専攻が持続的富累の重要な要素です。山舟では、人口減少と高齢化の中で、地域資源に基いた地産くらしへの取組みが行われています。

そしてその上、わが東北地方は、2011.3.11大震災・放射能汚染という連続的の困難に直面し、様々な苦悩と自助努力と支援の中で復興が取り組まれています。

どの地域づくりにも必要な視点は、地域の特性、すなわち「地域性」の理解にあります。地域の自然資源が適切に活かされ、それを巧みに活用して各個人が地域に貢献する手です。その土地の地域人、関係者、地域を維持することは、地域づくり、すなわち「地域の復興」には欠くことのできない力です。

そのための基礎を、現地学習、地域データ分析、地図作成技能の習得を通して身に付け、地域の問題に目を向け、そしていざ、自ら体当たりで地域に力をつけていこうではありませんか。

<p>Work</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台研究 女川まちづくり2010 三菱商業ゼミナール 福島研究 団武蔵研究 会津文化研究 国語地学研究 農学ゼミナール Conatd-研究 Humanistic, Geography 	<p>tkk abroad</p> <ul style="list-style-type: none"> Indonesia 1992 Ontario 1996 Wisconsin 1999 Seattle 2001 Malaysia 2003 タイ 2005 京都-奈良山 2010 	<p>新入生講習へ</p> <p>社会と産業地域案内</p> <p>ゼミ紹介</p> <p>空論 2005-1「山舟生2015」</p> <p>空論-2008</p>
<p>社会活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 鏡石町老人塾 仙台亮明 宮城野地元学 東区町内会 	<p>地理教育</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本理解教材開発 総合学習 2013年手帳地理公民部会 	<p>Excerpt</p> <p>contents</p>
<p>Contact</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究室: 3号館 5530号 (773-3350) 学科会館: 5号館 (375-3472) 産業地域研: 5号館 (内473) tkk(a.mail)@toku.ac.jp 	<p>東北学院大学</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員室 地域構想学科 tkk New Year Cards 	